

末野

すぐろの



2月号

(通巻918号)

砂紋

閑伽桶の蓋へと降り来桐一葉
一献のあとの本音や温め酒
恬として野の石に坐し吾亦紅
塗り替への堂の覆ひやそぞろ寒
街灯の人影伸ばす秋思かな
城跡の万葉に凝り露の玉
風を読む鬼の捨子の日和かな
山巒の十色重ぬるもみぢかな
海よりの風の一太刀破芭蕉
郵便受けに俳誌三冊文化の日
秋日濃し砂紋の著き川の底
今朝の冬山容の彫深くして

森清堯

小鳥来て

岡野里子

堂裏の矢場の静けさ曼珠沙華
空紺紙月金泥や望の月
脱穀の日付記されて稲架襖
小鳥来て人来て森の膨らみて
矢倉への途の湿りや実紫
石庭の思惟観音や風の色
秋風や敷居の高き解脱門
朝霧や白波の立つ潮位標
渡り鳥キングの塔の霧はれて
白雲を映す池塘や草紅葉
白々と明くれば鴉声冬立ちぬ
冬すみれ富士借景の辻地蔵

牛の鈴

黒滝志麻子

(顧問)

いち早く鴨の来てゐる波頭かな
 山々の色消しゆくや秋徼雨
 秋の灯のゆるる岬や橋白き
 ゆるやかに曲る大河や鴟日和
 大花野絶え間なく鳴る牛の鈴
 紅葉狩長きホームの一輛車
 くつさめや真夜の静寂の深々と
 校庭にボールのひとつ暮早し

甲矢集

声の余韻

森清信子

落日の色に染まりて白木槿
 仏頭のかもす風格杜鵑草
 渋味増す紅殻格子秋しぐれ
 色変へぬ松や天守の空の碧
 父の記憶詰まるどんぐり拾ひけり
 箸付くるには惜しき薬膳床の菊
 紅葉且つ散り苔に座す石仏
 洞窟に声の余韻や秋深み
 木や石を彫りて仏や竜の玉
 初霜や朝の寺院に響く鐘

試歩の杖

石黒興平

風の盆闇に梳かるる胡弓の音
 名の変はる川をかまはず下り鮎
 難聴の身にも届きぬ秋の声
 坪庭にゆるき風あり昼の虫
 コスモスの風をいなせる勁さかな
 試歩の杖木犀の香を連れ帰る
 水澄むや郷関思ふ心こそ
 残照を滑る機影や暮の秋
 風紋の浜にたたずみ秋惜しむ
 さざ波に水脈を重ねて鴨来る

室の花

菅野日出子

秋薔薇藁屋のひさぐ喫茶店
名ばかりの寺尾城址や葛の花
八方へ枝張る枇杷の花わびし
それぞれに着飾る小犬冬に入る
教室を辞して賜る室の花
着ぶくれて宇宙の神秘見る夕べ
駅前の路上ライブやからつ風
参道にそふ小流れや冬紅葉



乙矢集

配列は音順、月毎の循環



枯木星 長尾タイ

調律の和音の調べ鳴猛る
補聴器を外せし帰路や雁渡る
野阜や頭上飛び交ふ秋茜
園丁の長き一服新松子
甘き香や卓にころがる榎櫃の実
夕仕度急かす杣道枯木星
身を案じ姉の荷物にミニ懐炉

秋の暮

池乗恵美子

白といふ華やぎ零し萩の風
身ほとりの影のふゆるや秋の暮
花野道夕日の湖の見ゆるまで
俳号を持つも持たぬも秋燈下
行人となりて二万歩花野道
一灯を残し繕く夜長かな
かりそめの夢いまいちど実紫

ぬくめ酒

今村千年

薪積むや里はこぞりて冬支度
尼寺の跡と伝へて赤蜻蛉
雁鳴くや空の明けゆく伊良湖岬
うたかたのいのち惜しみぬくめ酒
いのちには限りあるらし枯蠟螂
一列に亀の並んで日向ぼこ
幼子にオセロで負けて冬ぬくし

風の色

大川暉美

リズム良き鼓笛の子らや天高し
稲架解きて風新しき畦の道
本堂の揺らぐ灯影や竹の春
冬近き厨の音の葉缶かな
岬鼻の源義の句碑風の色
移ろへる日輪背へ大根引く
苑小春木橋石橋太鼓橋

木の葉髪

太田良一

灯台をもたぬ岬や小鳥来る
郷関を出でて帰らず木の葉髪
終焉の画家の廃家や枯芙蓉
湯豆腐や屋号の読めぬ古暖簾
故里や老木若木木守柿
谷底へ餅を躲し山眠る
民宿は海の香りの蒲団かな

神無月

岡田史女

出航の汽笛遠くに霧の町
尺をなす魯田風の吹くままに
即売の練馬大根げに重し
膝の骨こきりと鳴りぬ神無月
ならひ吹く手櫛の髪のみしきしと
夫へつくるオートミールや片時雨
小春日のひざし斜めに雑木山

宿場町

小田嶋野笛

晩照へ大いなる囲や秋の蜘蛛
百年の桜の虚や色葉散り
勝菊へ夕日の金や城の庭
ひとときをアールグレーや栗鹿の子
逝く秋の針と糸買ふ宿場町
マッサージチェアに骨鳴る夜長かな
旅苞を背に立冬の始発駅

木 槿

加藤静江

純白の木槿ひと本濁り池
行合ひの空や流るる秋茜
かすかなる虫の音静寂深くせり
鐘楼を囲む静寂や薄紅葉
哀悼の句や静かなる秋の月
秋薔薇白を極むる夜の深く
戦なき明日を願ひて秋深む

万年青の実

高木邦雄

秋惜しむ晩鐘遠き深大寺
激湍へ紅葉かつ散る昇仙峡
文化祭長き謡を澱みなく
墨絵めく遠き灯台星月夜
晩節は美しく生きたし万年青の実
立冬や心引き締め朝練へ
有る無しの風に落葉や霏霏と舞ひ



青炎集

森清

堯選



横浜

六崎正善

古本の書込み跡の秋思かな
吹き上ぐる葉屑に紛れ秋の蝶
解けそむる真緒の糸や光る海
日溜りの色を染めたり草紅葉
生垣を跨ぐ脚立や松手入
松籟の葉山の海や石路の花

宮城

門間としゑ

茅を葺く師弟の黙や秋あかね
忽然と眼下の汽笛溪もみぢ
綿虫や村を出る友見送りにて
夫の腰に湿布勤労感謝の日
隙間風勝手知つたるやうに來ぬ
緑青の屋根の煌めき霜の花

川崎

滋野

暁

新稲架の香に包まるや昼の月
骨密度の数値の減らで秋渴き
捨つるやも知らぬ団栗拾ひけり
返信に添へらるる句や秋深し
電子辞書にもある解れ文化の日
秋澄むや脳目覚めよと鍋磨き

横浜

小嶋紘一

チェーンソーの音はたと止み秋没日
啄木鳥や杣道を往くヘルメット
ポランティア秋球根を持ち寄りて
子等は奈良吾は横浜十三夜
霏霏として银杏落葉の騒ぐ夜
万両は鳥のはこべる家苞か

横浜

片岡さか江

秋の薔薇風に乗りたる香の淡し
よく熟るる上枝の石榴主留守
登高の一服の茶の旨さかな
ころころと遊ぶ園児ら秋うらら
柿紅葉散りつぐ夕べ童歌
賑はへる公園なべて秋の色

横浜

岩上行雄

一本の千余をこぼし花芙蓉
実石榴の口すばむ形憎からず
雨の日や樹液に群るる秋の蜂
久し振りの棹売りの声萩を刈る
帚木紅葉燃えさかるにはあと少し
降圧剤の品切れの店冬隣

横浜

滝沢いみ子

ざわめきの釣船出たり朝の冷え
猫にぬーと出合へる苑や秋薔薇
殿に通草の三つ採りにけり
ミサイルのニュース朝から文化の日
地下鉄の入口さがし鯛雲
山荘の予約の取れず散紅葉

横浜

新倉ゆき江

赤い羽根の声かけ重く箱重く
新米や肩に食ひ込む宅配便
格差ある体感温度うそ寒し
ピーナッツの三十粒や海馬覚め
十日の菊屋の媼の魔女めきて
円安の石焼芋の高値かな

横浜

山崎稔子

洋髪の発祥の碑や鳥渡る
潮の香やなべて小ぶりの秋薔薇
糠雨の葉蔭にのぞき新松子
引き潮に洲走狙ふ小鷺かな
耳馴れぬ声の一際小鳥来る
枯葦や何処吹く風のもの忘れ

横浜

渡辺富士子

鶏頭やいつまで抱く自己主張
紅殻の格子戸残る街は秋
玄関の鍵穴二つ秋夕焼
空の色は秋そのものと思し召せ
剥けばすぐ三本の手やラフランス
初秋刀魚朝の市場に旗の立ち

耕 土 集 岡野 里子 選



柿染むる里の色こそ懐しき
涸沢の紅葉かつ散り鳥の声
課題句をせめ一粒の実山椒
発奮の四股によろめく秋思かな
涸滝や雫の脈の音を聴き

横浜 伊藤 鴉

銀杏散る杜や日向の黒き猫
日溜りの枯葉や余生のんびりと
鳩三羽落葉だまりに日を受けて
風神の意の儘なるや枯尾花
銀杏を拾ふ夫婦の影長し

横浜 丸山佐伎子

隣り合ふ若き夜学子ねびまさり
縁側に転がる柿や二つ三つ
バイバイの声遠くなり暮の秋
月蝕や今川焼を買ひに出て
乗り損ねて目で追ふ電車息白し

川崎 木村 純子

神木の注連の揺るるや神無月
かへり花今日はよきことありさうな
海風も日も存分に石路の花
剥製の視線を背に牡丹鍋
彫像の影の深さや冬の月

横浜 喜田 君江

手庇で雁の渡るを見てあたり
ジュラ紀より続く銀杏紅葉かな
年金に生きて勤労感謝の日
山寺の階段二百石路の花
コラーゲンなどと語りひ納豆汁

宮城 京極 久也

朝日影穂紫蘇へ雀十羽ほど
団栗を踏む音荒しまラソン部
夫搾る酢橘の香り廊下まで
やすやすと届く児の丈鳥瓜
短日の竈の熾火頬煽り

横浜 内山 みち

呼ぶ声の風に紛れて芒原
騒めきと手締の音や西の市
山容の黒く迫りて冬近し
小春空猫の欠伸の長長と
高みより町を睥睨冬鴉

横浜 鈴木 英雄

参道をゆつたりと猫菊日和
旧邸の洋風窓や実むらさき
ロープウェイの眼下一望溪紅葉
紅葉見や二泊三日の旅仕度
秋深し遠山の色染め上げて

横浜 小林 拓路

コスモスのゆるる街道浅間山
赤き実の指輪にしたき万年青かな
かまきりの鬨志の鎌を身構へて
満月を仰ぎ一茶に思ひ馳せ
色褪せて振り子のごとき石榴かな

横浜 宮崎 浩美

背を反らすソーラン節や運動会
秋麗駅のピアノに美青年
身にしむや葉備ふる旅支度
ゆづり合ふ緑道へ散る木の葉かな
街路樹の整備の業者冬はじめ

横浜 大庭美智代

風さやかアルパ奏つる異邦人
ピルの間の天体ショーや秋の夜
追伸の一行寂し露の秋
満月や宝来軒の屋根の上
寶石のやうなる石榴異人館

横浜 梅津まり子

曼珠沙華うねる山野は火の踊り
山の端の柿の鈴なりそのままに
暗き海山黒々と秋深し
荒れ果つる海辺の径や草もみぢ
薄墨の利根の原野や秋の暮

横浜 西 計郎

ころころと小石の小道小鳥来る
いつまでも眺めていたき秋の空
限りなき空の青さや秋惜しみ
公園の生暖かし秋の午後
裸婦像に音無く秋日そそぎをり

横浜 堺 昌子

マラソンや知事の走りて風爽か
昔語りの五右衛門風呂やすがる虫
醒め易き老のねむりや小夜時雨
櫓穂の風さはさはと来所
茶の花の茶房の垣や道の駅

横浜 平田 きみ

小川玉泉先生追悼句集

行く春の天の泉地へ立たれけり
なほさらの師のこゑ胸に秋の声
清らなる泉は今も滾々と
聖五月師のほほゑみの天へ召し
一灯の欠けて虚ろや雁渡し
ひぐらしや先師の訃報きく哀れ
すれ違ふごとの目差風涼し
師の金句標に行かむ星月夜
蓮の花見てをらると思ひしが
新緑の中や師の影見失ふ
星月夜偲ぶ恩師の影深し

森清 堯
岡野 里子
黒滝志摩子
森清 信子
菅野日出子
今村 千年
高木 邦雄
小田嶋野笛
岡田 史女
大川 暉美

蓴舟沼は静かに雨を受く
師の笑みの浮ぶ夜空や後の月
海坂に沈む日輪秋夕焼
師の句書く夫人の筆や鉦叩
師の色紙を偲びて卓や秋灯下
末黒野の教へはいまも小鳥来る
夫婦して同じ雅号や二つ星
秋深く俳句の御指導謝意深く
添削の手腕絶妙紫苑かな
身に入みて師の温顔と句短冊
蒼穹へ発ち給ふ師や秋の水
師の教へ永久に輝く星月夜
色なき風と海渡り富士に消ゆ
身に入むや今此処我と師の言葉
菊枯る師の色紙見つ独り酒

加藤 静江
太田 良一
和田 慈子
岩上 行雄
荒井 貞子
橋場 美篤
上月 智子
占部美弥子
大内 由紀
戸田 澄子
沼崎 千枝
池谷 鹿次
小林 清子
山崎 稔子
木下 晃